

日蓮大聖人御書全集

ときみつごへんじ

時光御返事

新版
1879
ゝ
1881

ときみつごへんじ

時光御返事

こうあんがんねん

がつ にち

さい

なんじようときみつ

弘安元年('78)

7月8日

57歳

南条時光

麦

白

米 いちだ

薑

おく

た

お

むぎのしろきこめ一駄・はじかみ、送り給ひ畢わんぬ。

斛

飯

王

たいし

阿 那 律

もう

ひと

いえ

こくぼんおうの太子・あなりちと申す人は、家にましま

とき

ぞくしよう

がつしこく

ほんしゅ

転

輪

じようおう

末

しし時は、俗姓は月氏国の本主・てんりん聖王のすえ、

しし

類

おう

孫

じようぼんおう

甥

斛

飯

おう

たいし

師子きよう王のまご、浄飯王のおい、こくぼん王には太子

てんか

卑

うえ

かちゅう

いちにち

あいだ

なり。天下にいやしからざる上、家中には一日の間

いちまんにせんにな

ひとしゅつにゆう

ろくせんにな

財

借

ろくせんにな

一万二千人の人出入す。六千人はたからをかりき。六千人

返

ふにな

うえ

てんげんだいいち

ひと

はかえりなす。かかる富人にておわする上、天眼第一の人、

ほけきよう

ふみようによらい

由

ほとけしる

たも

法華經にては普明如来となるべきよし、 仏記し給う。

かこ ぎよう

だいぜん

尋

昔

これは、過去の行はいかなる大善とたずぬるに、むかし、

獵 師

やま

獸

捕

過

りようしあり。山のけだものを取りてすぎけるが、また、

稗 作

じき

う

よ

物

ひえをつくり食とするほどに、 飢えたる世なればものもな

稗

飯 ひと

食

利 咤

もう

し。ただ、ひえのはん一つありけるをくいければ、りたと申

しゃくしぶつ

しょうにんきた

い

われ

なのか

あいだじき

なんじ

す辟支仏の聖人来つて云わく「我、七日の間食なし。汝

く

得

乞

たま

汚

ぞく

が食いものえさせよ」とこわせ給いしかば、「きたなき俗の

御 器 い

穢

始

そうろう

もう

得

ごきに入れてけがしはじめて候」と申しければ、「ただえ

いましよく

し

い

畏

進

させよ。今食せずば死ぬべし」と云う。おそれながらまい

しようにん

たま

稗 ひと 粒

らせつ。この聖人まいり給いしが、ただひえ一つびをなり

残 獵 師 返 たま 稗 変 猪 子

のこしてりようしにかえし給いき。ひえへんじていのこと

へん こがね こがねへん しびと

なる。いのご變じて金となる。金變じて死人となる。死人

へん きんじん ゆび 抜 う もと

變じてまた金人となる。指をぬいて売れば本のごとし。か

くじゆういちこう ちようじや う いま 阿 那 律 もう

くのごとく、九十一劫、長者と生まれ、今はあなりちと申

ほとけ みでし 稗

して仏の御弟子なり。わずかのひえなれども、飢えたる国

ちしや おん 命 続 報 得

に智者の御いのちをつぐゆえに、めでたきほうをう。

かしようそんじや もう ひと ほとけ みでし なか だいいち

迦葉尊者と申せし人は、仏の御弟子の中には第一に

尊 ひと ひと いえ 尋 ま 竭 提 こく

たつとき人なり。この人の家をたずぬれば、摩かだい国の

俱律陀ちようじゃ

こ

いえ

畳

せん

畳

いち

畳

尼くりだ長者の子なり。宅にたたみ千じよう。一じようは

厚

しちしやく

げほん

畳

こがねせんりよう

犁

あつさ七尺、下品のたたみは金千両なり。からすき

くひやくくじゆうく

ひと

犁

こがねせんりよう

こがねさんびやくしじゆうくく

九百九十九、一つのからすきは金千両。金三百四十石入

蔵 ろくじゆう

だいちようじゃ

妻

み

こんじき

れたるくら六十。かかる大長者なり。めはまた、身は金色

じゆうろく

照

にほんこく

そとおりひめ

過

かんど

李

にして十六里をてらす。日本国の衣通姫にもすぎ、漢土のり

夫人

超

ふうふ

どうしん

おこ

ほとけ

みでし

ふじんにもこえたり。この夫婦、道心を発して仏の御弟子

ほけきよう

こうみようによらい

言

たも

となれり。法華経にては光明如来といわれさせ給う。この

ににん

ひとびと

かこ

尋

むぎ

はん

しゃくしづつ

くよう

二人の人々の過去をたずぬれば、麦の飯を辟支仏に供養せ

かしようそんじゃ

う

こがね

銭

いちまい

ぶっし

誂

しゆえに迦葉尊者と生まる、金のぜに一枚を仏師にあつら

えて毘婆尸仏の像の御はくにひきし貧人は、この人のめとなれり。
びばしぶつ ぞう おん 箔 引 びんにん ひと 妻

いま にちれん しょうにん

今、日蓮は、聖人にはあらざれども、法華経に名をたて

こくしゆ 憎

わ み

塞 うえ

でし

通 ひと

り。国主にくまれて我が身をせく上、弟子・かよう人を

罵

打

しよりよう

取

も、あるいはのり、あるいはうち、あるいは所領をとり、

所

追

こくしゆ

うち

ひとびと

あるいはところをおう。かかる国主の内にある人々なれば、

こころ

ひとびと

訪

こと

たとい心ざしあるらん人々もとうことなし。このこと事

古

ことし

えきびよう

もう

けかち

もう

訪

ふりぬ。なかにも今年は、疫病と申し、飢渴と申し、とい

来 ひとびと

少

病

う

し

くる人々もすくなし。たといやまいなくとも、飢えて死ぬ

疑

ことうたがいなかるべきに、麦の御とぶらい、金にもすぎ、

たま 超

珠にもこえたり。彼のりたがひえは、変じて金人となる。

か 利 咤

稗

へん

きんじん

むぎ

おん

訪

こがね

過

ときみつ

むぎ

なん

へん

ほけきよう

もんじ

この時光が麦、何ぞ変じて法華經の文字とならざらん。この

ほけきよう

もんじ

しゃかぶつ

たま

ときみつ

こしんぷ

そう

法華經の文字は釈迦仏となり給い、時光が故親父の左右の

おんはね

りようぜんじようど

飛

たま

翔

たま

帰

御羽となりて、靈山浄土へとび給え、かけり給え、かえり

ときみつ

み

覆

育

たま

きようきようきんげん

て時光が身をおおい、はぐくみ給え。恐々謹言。

こうあんがんねんしちがつようか

にちれん

かおう

弘安元年七月八日

日蓮

花押

うえのどのごへんじ

上野殿御返事